

「芸術科合同授業の研究と実践」

昭和55年度

音楽科	遠藤	正之
美術科	白木	博也
工芸科	佐野	清
書道科	須田	義樹

「芸術科合同授業の研究と実践」

昭和 55 年度

音楽科	遠藤正之
美術科	白木博也
工芸科	佐野清
書道科	須田義樹

〔55年度の合同授業実施内容〕

51年度から始まったこの合同授業は、翌年度から音楽・美術・工芸・書道の四教科で統一テーマを決めて行なうという形式に定着した。

今回は「民衆の芸術」をテーマとして実施した。これは52年度の「正倉院」、53年度の「日本芸術の根元」と共に日本の芸術に関する一環したテーマの一つであり、昨年度に行なわれる予定であったが、事情によって今年度に繰り越しになったものである。

芸術科の授業は、鑑賞と実技で成り立っているが、鑑賞の場合にはややもすると支配階級のものや貴族趣味に傾りがちである。そこで少し視点を変えて芸術を見直してみようという考えで、我々に身近なこのテーマが選ばれた次第である。

・準備段階

・民衆の芸術のテーマが決定したのは54年度であるが、これは駒場に民芸館があり、調査に便利であること。また53年度に京都と益子を旅行し、河井寛次郎・浜田庄司などの民芸運動に関りのあった人達の作品や集収品を観ることによって啓発されたところが大きい。調査の場所と内容は以下の如くである。

53年度8月 京都の河井寛次郎記念館において、その作品・集収品及び仕事場を見学する。

53年度3月 益子の浜田庄司邸において、その子息からいろいろな説明を聞きながら、作品・集収品及び窯場を見学する。また、烏山において和紙の工場を見学する。

54年度9月 多治見の陶磁器意匠研究所において、陶磁器のデザインや技法の研究施設、陶磁器陳列館において古窯から発掘された平安時代から明治初期までの美濃焼の陶器や陶片を見学する。また、美濃紙の重要無形文化財である古田行三氏を訪ね、仕事場を見せてもらいながら説明を聞く。

54年度3月 倉敷の民芸館において日本及び世界の民芸品を見学する。

55年度9月 鳥取の民芸館において民芸品を見学する。

55年度10月 駒場の民芸館において民芸品を見学する。

猶、それぞれの実地調査において、スライド撮影・資料集収を行ない、合同授業の教材とした。

。上記の調査と各自で研究したものをもとにして協議を行ない、互いの教科について質問・意見を出し合いながら、授業内容について検討する。

- 指導案を作成する。
- 授業前のアンケート調査に関する協議をし、アンケートを作成する。
- 授業前のアンケート調査を行なう。
- 授業後のアンケート調査に関する協議をし、アンケートを作成する。
- 合同授業を実施する。
- 授業後のアンケート調査を行なう。
- 総括とアンケート整理をする。

・実施形態

芸術の授業の四時間を合同授業にあて、それぞれ一時間ずつ、講義・レコード鑑賞・スライド鑑賞・実物の鑑賞などという形式で行なった。

- ・各教科における指導の観点・目標・指導課程について。

1. 音楽科

・観点として

日本人の心から生まれ、民衆がその担い手となって関わり育ててきた日本の伝統音楽について知り、それ等の楽曲に理解と関心を深めさせたい。

・目標として

- 日本の伝統音楽の流れを知らせ、その中で民衆的音楽の在り様を知らせる。

◦ 民謡・民族芸能・その他の民衆的な音楽について知識を得させ、それ等を鑑賞して、日本の伝統的な民衆音楽の素晴らしさに触れる。またそういった音楽が、現代において何故に洋楽の陰に隠れてしまっているかを考える。

・指導課程として

- 導入として、先ず解説説明等一切なしで江戸の祭囃子を聴かせる。(テープ)

◦ 今回の授業のねらいは、日本の伝統的な音楽の素晴らしさに触れてみるところにあることを説明する。

◦ 民衆的な音楽とはどういうものであるかをはっきりさせるために、民衆的音楽とそうでないものを極く大ざっぱに区分してみる。(プリント)

- 日本の音楽史における民衆音楽の位置づけと、その様態について解説する。(プリント)

◦ 日本音楽には、単音や声楽を重んずる傾向があるが、このような日本音楽の特色を洋楽と比較しながら、日本人の音楽観や趣味について触れてみる。(プリント)

- 民衆音楽の鑑賞をする。解説は簡単にその曲の特徴を述べるだけに留める。

(1) 民謡

「江差追分」

「八木節」

(2) 三味線音楽

義太夫節「寺子屋」より

義太夫・清元掛合「吉野山」より

清元節「神田祭」より

長唄「越後獅子」より

◦民衆音楽の現状を述べる。

2. 美術科

・観点として

我々が美術作品を考える時、それは上層階級の美術のみを指している。しかし、それらの作品の底流に、民衆的美術の流れを見ないで、美術のすべてを眺めたとはいえない。この単元に於て、民衆的美術にスポットを当て、それらの因って来たる所に焦点を合せる。

・目標として

原始時代から江戸時代以降に至るまでの民衆絵画・民衆彫刻を、時代順にスライドによって鑑賞・解説し、民衆の偉大な創造力と技法を明らかにする。

・指導課程として

◦民芸運動及び民衆美術の要素について、具体的事例によって解説する。

◦原始時代から江戸時代以降までの民衆的美術を時代によって五つに区分し、それぞれ時代的背景を中心に解説しながらスライド鑑賞をする。

(1) 原始時代

土偶・石像・はにわ・古墳壁画

(2) 飛鳥・奈良時代

法隆寺五重塔羅漢像・戒壇院四天王邪鬼・絵因果経・法隆寺玉虫厨子扉絵

(3) 平安・鎌倉時代

龍燈鬼・婆藪仙人・信貴山縁起・地獄草紙・餓鬼草紙

(4) 室町・桃山時代

白杵石仏・地藏像・禅画・水墨画・彦根屏風

(5) 江戸時代以降

円空仏・木喰仏・土人形・こけし・根付・久隅守景の絵・鉄斎の絵・浮世絵・泥絵・江漢及び田善の絵・大津絵・テンペラ画・瓦版・絵馬・屏絵・染色絵

3. 工芸科

・観点として

合同授業のねらいに即し、民芸に対する単なる愛惜からではなく、現代生活をいとむわれわれが民芸のもつわざと心をいかにとらえ、どのように生かすべきかを芸術科を学ぶ者として考えさせたい。

・目標として

- 民芸とは何かを知らせ、民芸のあり方を探る。
- 民芸にふれさせ、その特色を考えさせる。
- 民芸と現代工芸とのかわりを生活デザインの面からとらえさせる。
- ・ 指導課程として
 - 民芸の趣旨について説明する。
 - 民芸運動とその意図について、民芸運動にかかわりの深い柳宗悦・河井寛次郎・浜田庄司などの業跡をあげ、またその意図に基づいて設立された民芸館の説明をし、民芸のあり方を探る。
 - 民芸とは民衆の工芸を意味する。従って民芸品と称されるものは、工芸品の中でも民衆の生活に即したもので、言い替えれば普段に用いられる実用品でなければならないという視点から、実物及びスライドによってその例を示し、民芸の特色を説明する。

黄八丈・大島紬・久略米餅・伊万里焼・美濃紙・民芸家具・その他

- 民芸品は本来実用のために作られたものであり、単に観賞するだけでなく、それをどのように生かすべきかを、生活デザインの面からとらえ、現代生活との関わりについて説明する。

4. 書道科

- ・ 観点として

日本の書といえ、つねに空海や藤原行成などの平安時代のものがとりあげられるが、今回は

55年度合同授業アンケート

	音 楽										美 術										
	音 楽 (45名)		美 術 (41名)		工 芸 (29名)		書 道 (23名)		合 計 (138名)		音 楽		美 術		工 芸		書 道		合 計		
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	
(1)	イ	42	93.3	38	92.7	27	93.1	21	91.3	128	92.8	43	95.6	41	100	28	96.6	22	95.7	134	97.1
	ロ	42	93.3	39	95.1	28	96.6	22	95.7	131	94.9	1	2.2	3	7.3	3	10.3	1	4.3	8	5.8
	ハ	26	57.8	20	48.8	12	41.4	15	65.2	73	52.9	43	95.6	41	100	28	96.6	23	100	115	83.3
	ニ	7	15.6	4	9.8	3	10.3	4	17.4	18	13.0	15	33.3	23	56.1	14	48.3	6	26.1	58	42.0
	ホ	16	35.6	11	26.8	12	41.4	10	43.5	49	35.5	41	91.1	37	90.2	25	86.2	19	82.6	122	88.4
	ヘ	5	11.1	2	4.9	3	10.3	2	8.7	12	8.7										
	ト	2	4.4	1	2.4	0	0	2	8.7	5	3.6										
	チリ	20	44.4	10	24.4	6	20.7	9	39.1	45	32.6										
(2)	イ	3	6.7	2	4.9	0	0	5	21.7	10	7.3	1	2.2	2	4.9	2	7.2	3	13.0	8	5.8
	ロ	11	24.4	7	17.1	3	10.7	2	8.7	23	16.8	8	17.8	19	46.3	10	35.7	3	13.0	40	29.2
	ハ	18	40.0	21	51.2	15	53.6	10	43.5	64	46.7	21	46.7	9	22.0	10	35.7	9	39.2	49	35.8
	ニ	13	28.9	11	26.8	10	35.7	6	26.1	40	29.2	15	33.3	11	26.8	6	21.4	8	34.8	40	29.2
(3)	イ	6	13.3	1	2.4	4	13.8	1	4.3	12	8.7	0	0	2	4.9	0	0	1	4.3	3	2.2
	ロ	6	13.3	3	7.3	5	17.2	5	21.7	19	13.8	2	4.4	7	17.1	4	13.8	1	4.3	14	10.1
	ハ	16	35.6	7	17.1	8	27.6	5	21.7	36	26.1	28	62.2	26	63.4	20	69.0	13	56.5	87	63.0
	ニ	41	91.1	39	95.1	23	79.3	18	78.3	121	87.7	25	55.6	31	75.6	19	65.5	13	56.5	88	63.8

現代の我々にとって時代的にも技法的にも、もっと身近な民衆の書というものについて考えてみたい。

・目標として

◦ 平守時代から江戸時代にかけての日本の書の流れを知らせる。

◦ 書が民衆に定着してゆく過程を知らせ、また民衆の書と言えるものにはどのようなものがあるかを示し、それらの書法について平安時代の書などと比較しながら、その特徴を考えてみる。

・指導課程として

◦ 今回のテーマである民衆の書の対象は、庶民文化の盛んになった江戸時代の書を中心とすることを説明する。

◦ 平安時代から室町時代にいたるまでの日本の書の流れを、尊円親王の入木抄を引用して説明する。

三筆・三跡からお家流の祖といわれる尊円親王までの書風の変遷をスライドを観ながら説明する。

◦ 江戸時代の書について——徳川家康の右筆が青蓮院流（尊円親王の流派）を善くしたことから、これが御用の書流となり、御家流と称されるようになる。これによって上は武士から下は庶民にいたるまで御家流を習うようになった——庶民一般にまで広まったお家流の書と、そこから

一 ト 調査結果〔事前〕

工 芸						書 道													
音 楽		美 術		工 芸		書 道		合 計		音 楽		美 術		工 芸		書 道		合 計	
人数	%																		
4	8.9	11	26.8	4	13.8	3	13.0	22	15.9	1	2.2	0	0	1	3.4	3	13.0	5	3.6
30	66.7	23	56.1	18	62.1	14	60.9	85	61.6	1	2.2	5	12.2	1	3.4	4	17.4	11	8.0
5	11.1	4	9.8	2	6.9	1	4.3	12	8.7	27	60.0	25	61.0	15	51.7	19	82.6	86	62.3
16	35.6	20	48.8	17	58.6	10	43.5	63	45.7										
1	2.2	6	14.6	2	6.9	2	8.7	11	8.0										
16	35.6	19	46.3	13	44.8	12	52.2	60	43.5										
2	4.4	3	7.3	3	10.3	3	13.0	11	8.0										
42	93.3	40	97.6	26	89.7	20	87.0	108	92.8										
2	4.4	1	2.4	2	6.9	1	4.3	6	4.3										
0	0	4	9.8	3	10.3	2	8.7	9	6.5	1	2.2	1	2.5	1	3.6	2	8.7	5	3.7
9	20.0	16	39.0	6	39.0	6	26.1	37	26.8	2	4.5	8	19.5	1	3.6	6	26.1	17	12.4
26	57.8	13	31.7	12	31.7	9	39.1	60	43.5	23	51.1	11	26.8	11	39.3	10	43.5	55	40.1
10	22.2	8	19.5	8	19.5	6	26.1	32	23.2	19	42.2	21	51.2	15	53.5	5	21.7	60	43.8
0	0	1	2.4	1	3.4	1	4.3	3	2.2	2	4.4	1	2.4	1	3.4	2	8.7	6	4.3
4	8.9	10	24.4	8	27.6	3	13.0	25	18.1	1	2.2	4	9.8	3	10.3	1	4.3	9	6.5
22	48.9	16	39.0	19	65.5	11	47.8	68	49.3	6	13.3	9	22.0	7	24.1	4	17.4	26	18.8
32	71.1	31	75.6	23	79.3	16	69.6	102	73.9	23	51.1	28	68.3	20	69.0	17	73.9	88	63.8

派生した勘亭流などの江戸文字と称される意匠文字をスライドによって観賞する。

・江戸末期になると従来の書に飽き足らず、唐風と呼ばれる新しい書道が生まれてくる。これらの作品を観賞しながら、御家流の衰退とその理由を考えてみる。

・アンケート調査について

本年は授業前と授業後にアンケート調査を実施し、授業前のアンケートでは生徒の知識や関心度、授業後のアンケートでは生徒の反応と理解度を聞いてみた。

・授業前アンケート

(1) 次にあげた民衆的音楽・民衆美術・民芸・民衆の書について、知っているものには○印をつけなさい。

音楽 イ、わらべうた ロ、民謡 ハ、長唄 ニ、清元 ホ、義太夫節 ヘ、地歌
ト、三曲 チ、箏曲

55年度合同授業アンケート

		音 楽 (と合同授業の形式)								美 術													
		音 楽 (37名)		美 術 (34名)		工 芸 (24名)		書 道 (19名)		合 計 (114名)		音 楽		美 術		工 芸		書 道		合 計			
		人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%		
I	イ	5	13.5	5	14.7	5	20.8	2	10.6	17	14.9											(114)	
	ロ	17	46.0	12	35.3	9	37.5	7	36.8	45	39.5												
	ハ	10	27.0	10	29.4	6	25.0	7	36.8	33	28.9												
	ニ	4	10.8	2	5.9	4	16.7	3	15.8	13	11.4												
	ホ	1	2.7	5	14.7	0	0	0	0	6	5.3												
II	(1)	イ	7	18.9	11	33.3	0	0	1	5.2	19	16.8	6	16.2	7	21.2	2	8.3	5	26.3	20	17.7	(113)
		ロ	20	54.1	12	36.4	15	62.5	9	47.4	56	49.6	14	37.8	16	48.5	16	66.7	10	52.6	56	49.6	
		ハ	10	27.0	8	24.2	8	33.3	9	47.4	35	31.0	15	40.6	7	21.2	6	25.0	4	21.1	32	28.3	
		ニ	0	0	2	6.1	1	4.2	0	0	3	2.6	2	5.4	3	9.1	0	0	0	0	5	4.4	
	(2)	イ	2	5.4	7	21.2	2	8.3	1	5.3	12	10.6	3	8.1	5	15.1	2	8.3	4	21.0	14	12.4	(113)
		ロ	24	64.9	15	45.4	8	33.4	12	63.1	59	52.2	15	40.6	12	36.4	11	45.8	9	47.4	47	41.3	
		ハ	9	24.3	5	15.2	12	50.0	6	31.6	32	28.3	14	37.8	9	27.3	10	41.7	6	31.6	39	34.5	
		ニ	2	5.4	6	18.2	2	8.3	0	0	10	8.9	5	13.5	7	21.2	1	4.2	0	0	13	11.5	

II 感想・意見

〔音楽選択者〕

- ・興味深いものもあったが時間が少なすぎた。1つ1つに時間をかけきちんと説明して欲しい。他時間が短い指摘(7)
- ・楽しかった。面白かった(2)
- ・話を聞くだけでなく実際に物を作ったりしたい(1)
- ・巾広い視野で物事を考慮できとても役に立った(1)

・スライドを主にするより講義を主にした方が良い

(1)

〔美術選択者〕

- ・面白い、勉強になった、種々の芸術分野がわかった、教師の熱意に感激、テーマよし、民芸館に行くべき、その他の賛成意見(9)
- ・たいくつ、つまらない、興味のない内容(4)
- ・時間が足りない、あわただしい(2)
- ・移動はめんどろ。・スライドで大衆の芸術はわかるはずがない。もっと面白い題材を。・何回も続

美術 イ, 土偶 ロ, 大津絵 ハ, 浮世絵 ニ, 円空の彫刻 ホ, 絵馬
 工芸 イ, 黄八丈 ロ, 伊万里焼 ハ, 紅型染^{びん} ニ, 美濃紙 ホ, 津軽こぎん
 ヘ, 久略米^{かすり}耕 ト, しゅろみの チ, 輪島塗 リ, 浅立のわらぐつ
 書道 イ, 御家流 ロ, 勘亭流 ハ, かわら版

(2) 民衆の音楽・民衆美術・民芸・民衆の書について、それぞれどの程度の興味や関心をもっていますか。イ～ニの内一つを選び○印をつけなさい。(イ～ニは四教科とも同じ)

- イ, 大変興味や関心をもっている。
- ロ, 少し興味や関心をもっている。
- ハ, あまり興味や関心をもっていない。
- ニ, 全く興味や関心をもっていない。

(3) 民衆の音楽・民衆美術・民芸・民衆の書について、どのような知識や体験をもっています

一 調査結果〔事後〕

工 芸								書 道												
音 楽		美 術		工 芸		書 道		合 計		音 楽		美 術		工 芸		書 道		合 計		
人数	%																			
7	18.9	5	15.6	2	8.3	0	0	14	12.5	3	8.1	4	12.5	0	0	2	10.5	9	8.0	
17	45.9	10	31.3	5	37.5	4	21.1	40	35.7	12	32.4	10	31.3	4	16.7	7	36.8	33	26.5	
12	32.5	11	34.4	9	37.5	13	68.4	45	40.2	16	43.2	12	37.5	12	50.0	9	47.4	49	43.8	
1	2.7	6	18.7	4	16.7	2	10.5	13	11.6	6	16.2	6	18.7	8	33.3	1	5.3	21	18.7	
2	5.4	5	15.1	1	4.2	0	0	8	7.1	1	2.7	3	9.4	0	0	3	15.8	7	6.3	
17	46.0	9	27.3	9	37.5	3	15.8	38	33.6	8	21.6	6	18.8	2	8.3	6	31.6	22	19.6	
15	40.5	10	30.3	9	37.5	14	73.7	48	42.5	18	48.6	14	43.7	10	41.7	10	52.6	52	46.4	
3	8.1	9	27.3	5	20.8	2	10.5	19	16.8	10	27.0	9	28.1	12	50	0	0	31	27.7	

けねば意味がない。・実習をさせよ。・民芸館に行くような実地見学をさせよ。・もっとスライドを(以上各1)

〔工芸選択者〕

- ・時間が短かすぎる(8)
- ・企画は良いが無理がある(3)
- ・各分野の関連のあるものを(3)
- ・年2回位やって欲しい(1)
- ・興味がなかった(2)

〔書道選択者〕

- ・聞いてみると案外面白かった(1)
- ・時間が少ないように思う(1)
- ・いつもとちがっていて面白かった(1)
- ・もっと事前の準備をしっかりやって欲しい(1)
- ・日本の民族芸術と比較する意味で西洋の民族芸術も授業して欲しい(1)

か。あてはまるものには○印をつけなさい。

音楽 イ、自分が演奏に参加したことがある。

ロ、生の演奏をきいたことがある。

ハ、レコードできいたことがある。

ニ、テレビ・ラジオなどできいたことがある。

美術 イ、自分で製作したことがある。

ロ、製作しているところを見たことがある。

ハ美術館などで実物を見たことがある。

ニ、テレビ・印刷物などで見たことがある。

工芸 イ、自分で製作したことがある。

ロ、製作しているところを見たことがある。

ハ、民芸館などで実物を見たことがある。

ニ、テレビ・印刷物などで見たことがある。

書道 イ、自分で書いてみたことがある。

ロ、書いているところを見たことがある。

ハ、実物（真跡）を見たことがある。

ニ、テレビ・印刷物などで見たことがある。

○授業後アンケート

I 今回行なった合同授業の形式についてどう思いますか

イ、大変よかった。

ロ、よかった。

ハ、よくもわるくもなかった。

ニ、あまりよくなかった。

ホ、わるかった。

II-1(1) 民衆的音楽・民衆美術・民芸・民衆の書について、どの程度理解できましたか。

(イ～ニは四教科とも同じ)

イ、よく理解できた。

ロ、少し理解できた。

ハ、あまり理解できなかった。

ニ、全く理解できなかった。

II-1(2) 民衆的音楽・民衆美術・民芸・民衆の書について、どの程度の興味や関心をもてま

したか。(イ～ニは四教科とも同じ)

イ、大変興味や関心をもてた。

ロ、少し興味や関心をもてた。

ハ、あまり興味や関心をもてなかった。

ニ、全く興味や関心をもてなかった。

・総括の内容

◦民衆芸術を語るのに、一時間では時間の不足を感じたというのが全員の意見であった。このことは、それぞれ自分の教科の時間を削って行なうのには限界があり、また合同授業は実験的なもので、時間が足りないのは承知の上であるが、授業を受ける生徒の立場からみれば、やはり一考を要すを問題である。

・全体として用意が不足していたように思う。

◦合同授業も五年目になるので、教師の側の緊張感がうすれ、ややマンネリの傾向が見えはじめているのではないか。

◦民衆芸術というテーマは、工芸にとっては指導しやすく、合同授業のテーマとしてもふさわしかったと思うし、意味があった。

◦テーマとしては良いと思うが、今までの授業形態では行なったことがないので、いきなり民衆芸術を持ち込むことに無理を感じる。

◦書道と工芸は人数が30人前後と少なく授業がやり易い。

◦生徒の授業態度は総じて自分の教科が一番うるさく、また前に坐る生徒はまじめに聞いているが、うしろに坐っている者は話を聞いているのかどうかかわからず、授業態度もよくない。